

第 288 回研究報告会（1月 18 日）

天理教原典の位置づけ

澤井治郎

天理教には3つの原典「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ」がある。『改訂天理教事典』には、「原典」とは「親神の啓示を内容にもつ書物」で、歴史的には「昭和 24 年（1949）10 月 26 日に、はじめて天理教の教えと信仰を表明した『天理教教典』が発刊されるが、その教典編纂の原（もと）になった書物という意味で原典と称されるようになった」とある。

それでは、「原典」という呼び方や位置づけが明確になる以前には、原典、特に「おふでさき」「おさしづ」はどのように読まれていたのか。この点を、「おふでさき」と「おさしづ」が初めて公刊されてからあまり年限の経っていない昭和 4 年の『みちのとも』における特集「おふでさきと御指図を研究して」、「おさしづ講習会に就て」から探ろうとした。そして、そこには「宝蔵」「宝典」「秘典」「神典」などの呼び方や、“正しく読むには「泥海古記」の理解が必要”などの指摘があることを報告した。

日本医学哲学・倫理学会公開講座に参加

金子珠理

2月6日、京都市大学のまち交流センターにて開催された標記講座に、深谷所長、堀内主任と金子が参加した。日本医学哲学・倫理学会は、全国の医学・歯学・薬学系大学の「哲学」「倫理学」担当教員が中心となり、医療系教員や「宗教学」担当者も参加する形で 1982 年に創設された。さらに看護系の研究者・臨床従事者および広く人文・社会系研究者が加わり、多様な視点から医学哲学や医療倫理学をリードしてきた。2002 年度からは一般市民を対象とする公開講座をほぼ毎年実施。本年度のテーマは「生命の始まりへの介入はどこまで認められるか—卵子提供・代理出産・出生前診断・着床前診断—」であった。

発題者 4 名とそのタイトルは以下の通りである。堀田義太郎（東京理科大）「卵子提供をめぐる倫理的諸問題について」、貞岡美伸（安田女子大）「代理出産の実施をめぐる日本の現状と倫理的・社会的な問題」、増田弘治（読売新聞）「新型出生前診断。臨床研究からわかること」、利光恵子（立命館大）「日本における着床前診断をめぐる争いの現代史」。

堀田氏は、卵子提供に固有の問題（危険性・負担）という視点から自己決定・同意の条件と真正性の重要性を導き出す。提供者の負担はまた、金銭授受の禁止と匿名化という制約の根拠にもなると指摘した上で、そもそも卵子提供の「ニーズ」の前提にある価値観について批判的に検討した。貞岡氏は、代理出産をめぐる国内外の現状（禁止・許容・無規制・自主規制）を報告した後、代表的な代理出産例を挙げながらその倫理的・社会的・法的問題点に言及し、誕生する子どもの立場で考えることの必要性を強調した。増田氏からは、臨床研究の形でスタートした新型出生前診断について報告がなされた。遺伝カウンセリングの質を確かめることを主目的とした臨床研究だが、そこ

からはカウンセリングの不十分さが指摘できるという。利光氏は、生命の選別技術として厳格な規制が行われてきた着床前診断が、不妊治療の場に組み込まれることにより、その意味が大きく変化してきたことを実証的に跡づけた上で、障害者や女性の人権をふまえた多様な生の存在を認める社会の実現にこの技術がどのように位置づけられるのか、と問題提起した。

利光氏は「2004 年頃を機に、急速に不妊治療の一環としての着床前診断という枠づけを得て、女性（カップル）の幸福追求のひとつとして受容され普及しはじめた」と指摘しているが、それは 21 世紀に入って様々な少子化社会対策の法律が施行されるのとちょうど同時期である。現在も進行中の、高校「保健」の副教材配布、浦安市市長の成人式での発言、「女性の健康の包括的支援法案」などに窺える人口政策的な意味合いを考えながら、4 報告を聞いた。

（4 頁からの続き）

そのように考えているときに、たとえば『聖書』や『ヴェニス商人』、モーアの『贈与論』などを読みなおし、資本主義再考の基本文献として「借り」の積極的価値を学際的に考察したナタリー・サルトゥー＝ラジュ著の『借りの哲学』（高野優監訳、太田出版、2014 年）の出版に出会ったのは衝撃的であった。ラジュの贈与論の特徴は、贈与には必ず借りができる、無償の贈り物は存在せず、「借り」は否定的なものではなく、「借り」のない人間などいないという前提から展開されてゆく。『at プラス 20（特集）思想と活動』（太田出版、2014 年 5 月号）は『借りの哲学』を特集し、著者ラジュが日本の読者への手引きとして「借りとは何か」という一文を寄稿している。ラジュは主張する。「確かに《借り》は、義務として人を縛るという側面をもっている。しかし、そればかりではない。《借り》は人間関係の基礎となるという肯定的な側面をもっているのである。」ラジュが考察する人間の一生をとりまく多重な《借り》の諸相から演繹すれば、その先には「かしの・かりもの」の個的天理心身論がおおきく社会化する、世界陽気ぐらしの「事的世界観」を目指すパラダイム転換の教育的・思想的基盤が見えてくる予感がする。ラジュはバラモン教の、人は神から時間を限って「命」を《借り》ているという「負債の神学」にも積極的な関心を示しているからでもある（97～99 頁）。

平成 27 年度公開教学講座

天理教と現代社会の生死観

第 5 講 2016 年 2 月 25 日（木）

「古い」 幡鎌一弘

第 6 講 2016 年 3 月 25 日（金）

「死」 安井幹夫

場所：天理教道友社 6 階ホール

時間：10 時～11 時 30 分

（前年度より 30 分繰り上げて開催します）

*お車での来場はご遠慮下さい。